慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	説話の中の句題詩
Sub Title	Sino-Japanese topic poetry in narrative literature
Author	佐藤, 道生(Sato, Michio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.95, (2008. 12) ,p.89- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩松研吉郎教授高宮利行教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

説話の中の句題詩

佐藤　道生

一

『古今著聞集』巻四に次のような説話が収められている。

少納言入道信西が家にて人々あつまりてあそびけるに、「夜深催管絃」といふ題にて当座の詩を作りけるに、皆人は作りいだしたりけるに、敦周朝臣案じいださぬ気色にて程へにければ、満座興醒めてけり。あまりにすみて侍りければ、有安が座の末にありけるに、入道朗詠すべきよしをすすめければ、「第一第二絃索々」といふ句を詠じたりけり。此の心、自然に此の題によりきたるけるにや、敦周朝臣やがて作りいだしたりけり。「龍吟水暗両三曲、鶴唳霜寒第四声」と作りたりける、殊に其の興ありて、人々感歎しけり。彼の朗詠の心いと相違なきにや。

（128 敦周が秀句の事）

信西入道が当座の詩会を催したとき、出席者の一人、藤原敦周はなかなか詩を作ることができなかった。そこで信西

は中原有安に命じて朗詠させたところ、その朗詠の句が題意に適っていたので、敦周は即座に詩想がひらめき、一首を為すことができた。その中の一聯は秀句としてもてはやされた、という内容である。末尾に「彼の朗詠の心いと相違なきにや」とあるように、この説話は一言で言えば、朗詠の効能を説いたものと見なすことができる。しかし、ここで今一歩踏み込んで明らかにしなければならないのは、敦周の詩句が秀句として評価されたのは何故か、彼の詩句のどのような点が優れていたのか、ということであろう。その点を明らかにしない限り、この説話を理解したことにはならない。本稿では、敦周の詩句が秀句と評価された理由を当時の作文のあり方に即して考えてみたい。

二

この説話には信西（一一〇六―一一五九）、藤原敦周（一一一九―一一八三）、中原有安（生没年未詳。一一九五生存）の三人が登場する。いつのこととは記されていないが、三人の活躍時期から推して凡そ近衛朝から後白河朝にかけての頃の出来事であったと見てよかろう。当時、貴族たちの催す詩会では、即興的に詩を賦する場合と、詩題を設定して賦する場合とがあった。前者の場で作られる詩は無題詩と呼ばれ、後者は漢字五文字から成る句題を設定することを原則とした（詩体はどちらの場合も七言律詩）。この説話の詩題「夜深催管絃」（夜更けまで管絃に興じる、の意）はまさにその句題である。七言律詩ならば押韻、平仄、頷聯・頸聯を対句にするといった近体詩の規則を守って一首を作れば問題はない。しかし句題詩の場合、それに加えて本邦独自に定められた構成上の規則が存在した。それは七言律詩の首・頷・頸・尾の各聯を役割上、題目、破題、本文、述懐と規定するものである。実例に従って説明することにしたい。

天永二年（一一一一）十一月二十五日、権中納言藤原忠通は自邸で詩会を開催した。参会者はすべて十九人。忠通以

外は皆四位以下の中下級文人貴族であった。次に掲げるのはそのとき藤原永実（一〇六二―一一一九）が賦した句題詩（『中右記部類紙背漢詩集』所収）である。

対雪唯斟酒　　雪に対ひて唯だ酒を斟むのみ

1高閣巻簾対雪程　　高閣　簾を巻きて雪に対ふ程
2唯斟桂酒屢呼平　　唯だ桂酒を斟むのみにして屢ば呼平す
3映樽残月冷還湿　　樽に映る残月は冷ややかにして還た湿へり
4入盞落花消又軽　　盞（さかづき）に入る落花は消えて又た軽し
5乗興自催尋戴思　　興に乗れば　自づから戴を尋ぬる思ひを催す
6勧巡暗識引枚情　　巡りを勧むれば　暗（そら）に枚を引く情を識る
7黄門文会多賢哲　　黄門の文会　賢哲多し
8何必梁園召客卿　　何ぞ必ずしも梁園に客卿を召さん

雪見をしながら、ひたすら酒を酌み交わす。

たかどので簾を巻き上げ、雪の降るさまを見ながら、ひたすら美酒を酌み交わし頻りに唱平する。酒樽に浮かんだ有明の月が冷たく水気があるのに驚くと、それは何と雪だった。酒杯にひらりと落ちた花びらが溶けて消えたところを見ると、あれも実は雪だったのか。酒興に乗れば、雪の晩に酒を飲んだ王徽之が思い立ってはるばると戴逵を尋ねたように、自ずと友人に会いたくなるものだ。巡流の酒を勧められれば、漢の梁王が雪の晩の酒宴に枚乗を

召し寄せた気持ちも何とは無しに理解できる。今この中納言殿の詩会には（身分はそれほど高くないけれども）多くの賢哲が集うている。どうしてわざわざ賓客として公卿を招く必要があろうか。

本来、句題は古人（中国の詩人）の五言詩の一句を採って詩題とするものだった。しかし、時代が下るにつれ、題者（詩会で詩題を選定する役目の者）が新たに作るようになった。この「対雪唯斟酒」という句題もおそらく題者（この時は菅原在良）が時節に合わせて作ったものであろう。

まず首聯（第一句・第二句）では詩題の五文字を全て用いて、題意を直接的に表現しなければならない。また題字はこの聯以外に用いてはならない。当時、詩題のことを題目と言い習わしていたので、首聯を別称して「題目」と呼ぶ。永実の詩では「対雪」を上句に、「唯斟酒」を下句に置いている。

次に頷聯（第三句・第四句）、頸聯（第五句・第六句）では対句を用いて題意を敷衍する。このとき詩題の文字をそのまま用いてはならない。これを「破題」と言う。またどちらかの聯に故事を詠み込むことが望ましく、その場合は「破題」と言わずに「本文」と言う。この詩の場合、頷聯が「破題」、頸聯が「本文」である。「破題」の方法は基本的に語の置き換えだが、同義語を用いることは避けなければならない。飽くまでも題意を展開することに主眼を置くのである。頷聯では、上句の「樽」と下句の「盞」とが句題の「唯斟酒」に当たる語で、「残月冷還湿」と「落花消又軽」とが句題の「対雪」を敷衍した表現である。このように題意は句の上下でそれぞれ完結させなければならない。

頸聯に於いても上句・下句それぞれで題意を満たす必要がある。上句の「尋戴」は『蒙求』の「子猷尋戴」から得た語である。次に李瀚自註を掲げる。

世説、王子猷居山陰而隠。夜大雪。眠覚、開屋酌酒。四望皎然。因起彷徨、詠左思招隠詩。忽憶戴安道。時戴在剡縣。便乗一小船、経宿方至。造門不前返。人問其故也。王曰、乗興而〔行、興尽而〕返。何必見戴也。（〔　〕内は脱文。『世説新語』に拠って補った。）

（世説に、王子猷、山陰に居りて隠れたり。夜大いに雪ふれり。眠り覚めて、屋を開きて酒を酌む。四望皎然たり。因りて起きて彷徨して、左思が招隠詩を詠ず。忽ちに戴安道を憶ふ。時に戴は剡（せん）縣に在り。便ち一の小船に乗りて、宿を経て方に至る。門に造（いた）りて前まずして返る。人、其の故を問ふなり。王曰はく、興に乗りて行き、興尽きて返る。何ぞ必ずしも戴を見んや、と。）

これによれば「尋戴」は、王徽之が夜雪を見ているうちに興趣を押さえがたくなって友人の戴逵を訪ねたことを言うのであるから、句題の「対雪」を言い換えたことになる。「乗興」も『世説』の文中に見える語で、これは句題の「唯斟酒」に当たる。落句の「引枚」は『文選』収める謝恵連の「雪賦」を典拠とする。この作品は、兎園に遊んだ梁王が司馬相如に命じて、折しも降り始めた雪を題として賦を作らせるという設定で書かれていて、その宴席には枚乗も召し出されている。

歳将暮、時既昏。寒風積、愁雲繁。梁王不悦、遊於兎園。乃置旨酒、命賓友。召鄒生、延枚叟。相如末至、居客之右。俄而微霰零、密雪下。

（歳将に暮れなむとす、時既に昏なり。寒風積り、愁雲繁し。梁王悦ばずして、兎園に遊ぶ。乃ち旨酒を置きて、賓友に命ず。鄒生を召し、枚叟を延く。相如末に至りて、客の右に居れり。俄らくあって微霰零り、密雪下る。）

文中「延枚叟」とあるのを永実は「引枚」と表現したのである。句題の「対雪」に当たる。下句で句題の「唯斟酒」に当たるのが、「乗興」と対を為す「勧巡」であることは言うまでもない。このように頸聯の二句は故事を用いて破題されている。

一首の締めくくりが尾聯（第七句・第八句）である。ここに至って詩人ははじめて自らの思いのたけを述べることが許される。それ故この聯を「述懐」と言う。しかしそれも題意をふまえての述懐でなければならない。ここでは、この宴を「梁園」（梁王が雪見の宴を催した兎園）に喩えて、彼の宴席に劣らず此処にも賢哲が集まっていることを指摘し、彼等の庇護者である忠通の徳を称えたのである。

以上の説明から明らかなように、句題詩は詩題が詩句の表現を強く拘束する詩体であり、題字と詩句との対応関係が緊密である点に大きな特徴がある。したがって、当時の詩人たちは、出題された句題を巧みに詠みこなすこと、特に頷聯と頸聯とに於いてすぐれた破題表現を展開させることに最も心を砕いたのである。詩人の評価は破題の語彙をいかに多く蓄えているかに懸かっていたと言っても言い過ぎではない。試みに平安時代を代表する詞華集『和漢朗詠集』を繙いてみると、本邦句題詩からの摘句が多く見出され、その殆どは一首の頷聯または頸聯である。このことからも頷聯・頸聯に於ける破題の巧拙が詩の評価を決定する重要な要素であったことが知られよう。

さて、以上のことを念頭に置いて、敦周の詩句を読むことにしよう。

三

作者の藤原敦周は式家藤原氏、従四位上文章博士茂明の男。母は日向守中原広俊女である。大学寮の紀伝道に学び、対策及第の後、大内記、弾正大弼を経て、正四位下文章博士に至った。寿永二年（一一八三）三月三日出家、同年十月九日、六十五歳で没した。この経歴に照らして明らかなように、敦周は歴とした儒者であったから、前節で説明した句題詩の構成方法を熟知していたことは疑いない。彼の作った詩句をもう一度掲げよう。

龍吟水暗両三曲　　龍吟　水暗し　両三曲
鶴唳霜寒第四声　　鶴唳　霜寒し　第四声

詩題は「夜深催管絃（夜深けて管絃を催す）」という句題である。この一聯は対句を成しているので、七言律詩の頷聯か頸聯か、そのどちらかである。何れにしても破題しなければならない一聯である。先に述べたとおり、頷聯・頸聯では題意を上句・下句それぞれで満たすのが原則である。しかし、この句題の場合、それとは少し異なる構成方法を用いなければならなかった。

句題は二つの事物が組み合わされているのが通常の形である。先に見た「対雪唯斟酒」ならば、「雪」と「酒」との組み合わせである。ところが、この句題には片方に並列構造を持った二字熟語が用いられている。「管絃」の語がそれである。このような二字熟語を当時、双貫語と呼んだ。双貫語を含む句題の場合、双貫語を形成する二つの事物をそれ

ぞれ一聯の上句と下句とに詠み分けて表現しなければならない。この句題ならば一聯の一方の句で「夜深催管」を表し、他方の句で「夜深催絃」を表し、二句合わせて題意を満たすようにするのである。

そこでまず上句を見ることにしよう。「水暗」は句題の「夜深」を言い換えた表現である。「龍吟」は『文選』所収、馬融の「長笛賦」に、

近世双笛従羌起。羌人伐竹未及已、龍鳴水中不見己。截竹吹之声相似。剡其上孔通洞之。裁以当籥便易持。

（近世の双笛は羌より起る。羌人竹を伐りて未だ已ひるに及ばざるに、龍水中に鳴いて己れを見せず。竹を截りて之れを吹くに声相ひ似たり。其の上の孔を剡いで通し洞す。裁りて以て籥に当つれば便にして持ち易し。）

とあるのを踏まえている。羌人の作った双笛の音色が龍の鳴き声に似ていたことから、「龍吟」は笛の音を言う。笛は管楽器であるから、「龍吟・両三曲」は句題の「催管」を表したことになるのである。したがって上句は「夜の闇に包まれた水辺から、龍の鳴くような美しい笛の音が聞こえてくる」というほどの意味であろう。

次に下句を見ることにしよう。ここでは、「霜寒」が句題の「夜深」に相当する表現である。敦周が「鶴唳・第四声」の表現を得た朗詠は『和漢朗詠集』管絃に収められている。白居易の「新楽府」の一、「五絃弾」からの摘句である。

第一第二絃索々、秋風払松疎韻落。第三第四絃冷々、夜鶴憶子籠中鳴。第五絃声尤掩抑、隴水凍咽流不得。

（第一第二の絃は索々たり、秋の風 松を払つて疎韻落つ。第三第四の絃は冷々たり、夜の鶴 子を憶つて籠の中に

鳴く。第五の絃の声は尤も掩抑せり、隴水凍り咽んで流るること得ず。）

説話には朗詠の句が「第一第二絃索々」とだけしか示されていないが、「鶴唳・第四声」が傍線部「第三第四絃冷々、夜鶴憶子籠中鳴」から得られた表現であることは言うまでもない。したがって下句は「寒い霜夜に、母鶴が子を思って鳴いているような物悲しい（五絃琵琶の）第四絃の音色が聞こえてくる」とでも訳すことができよう。

このように敦周の一聯は上句で「夜深催管」を表し、下句で「夜深催絃」を表し、上下合わせて題意を満たすことに見事成功している。これが秀句と評価されたのは、ひとえに破題表現として完璧だったからである。

中世の説話集の中には、秀句にまつわる説話が散見される。そこでは、秀句がどのような状況下に生まれ、どのような結果をもたらしたのかといった話題が興味深く語られる。しかし、その秀句が秀句と評価された所以は決して語られない。当時の読者にとって、それは説明するまでもない了解事項だったのであろう。本稿では「破題」こそが詩の巧拙を決定する重要な評価基準であったことを述べ、説話を理解する一助とした次第である。